

実践研究報告書

平成26年度末大学院派遣修了教員
いの町立伊野中学校 教諭 坂本佳子

1 研究の成果と課題をふまえた平成27年度の実践内容

(1) 研究の成果と課題

ほぼ全国の小・中学校に道徳教育推進教師が配置されているが、児童・生徒の道徳性の向上につながる効果的な道徳教育が実践できていないことから、筆者は以下のような研究仮説を立て研究を進めた。

＜研究仮説＞ 道徳教育推進教師を中心とした機能的な推進体制を整備することで、道徳授業を要とする心を耕す道徳教育を全教師が行うことができるのではないかと。さらにそのことが、児童・生徒の道徳性の向上につながるのではないかと。

研究の結果、前任校では「機能的な推進体制」を整備することによって、「協働」を核とした「心を耕す道徳教育」を行うことができる体制を創造することができ、さらには、この体制を土台として「心を耕す道徳授業」と他の教育活動を関連させた「心を耕す道徳教育」の質的向上を目指すことが大切であると考えた。そのためには「道徳教育の指導計画の作成」、「道徳の時間の充実と指導体制」、「道徳の研修の充実」の3点を中心に、道徳教育推進教師が推進・調整・支援の役割を果たす必要がある。これには目指す道徳教育や道徳授業、児童・生徒の姿を明確にイメージすることが重要であると考えた。

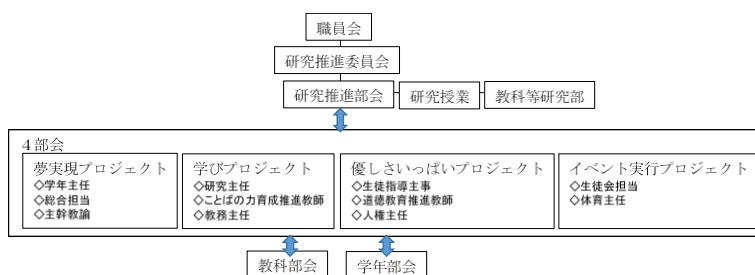
またこの研究において、課題として残ったものは以下の2点である。

- ① 年度当初の道徳教育推進教師による推進・調整・支援の見通しの明確化
- ② 推進体制整備による教員の多忙感の解消

道徳の時間は、各教科等に比べて軽視されがちで、道徳教育の要として有効に機能していないことも多く、このことが道徳教育全体の停滞につながっていると言われている。やはり機能的な推進体制により「道徳授業を要とする心を耕す道徳教育」を目指すことが重要であると考えた。その中心となる道徳教育推進教師は、一層、推進・調整・支援の役割を果たさなければならない。

(2) 研究の成果と課題をふまえた平成27年度の実践内容

筆者は今年度、伊野中学校に赴任し、前年度より務めている道徳教育推進教師の下、第3学年の道徳担当を任された。勤務校は「高知夢いっぱいプロジェクト推進事業」研究推進校であり、「自ら学び、ともによりよく生きる生徒の育成～関わりあい、高めあい、鍛えあう授業づくり～」を研究主題とし、研究体制もその推進を目的に、以下のように構成されている。



勤務校の道徳教育推進体制の形態は、「優しさいっぱいプロジェクト」で心の教育の方針や重点を設定する。それをもとに所属するそれぞれの主任を中心とした組織や、生徒が組織する全校推進委員会の果たす役割について協議する。その協議した内容に基づき、道徳教育では道徳教育推進教師を中心に各学年の道徳担当が重点や方針を設定し、学年部会で具体的に道徳教育の充実について取り組むという流れで進めるといえるものである。

赴任1年目のため、学年の道徳担当の役割について研究の課題の一つである「推進体制整備による教員の多忙感の解消」を果たすことを中心に取り組み、道徳教育推進体制については1年を経た上でその成果と課題を考察し、年度末に次年度の改善策を提案することとした。考察の際、研究で使用した「道徳指導に関するアンケート」について勤務校教員に回答してもらい、参考資料とした。

(2) 平成27年度の実践の成果と課題

① 「道德教育の指導計画の作成」

- 成果 年度当初に指導計画の見直しがされなかったものの、教員調査の設問「年間指導計画にそって『道德の時間』の授業実践をしている。」「年間指導計画の文章資料が児童・生徒の実態に即していない時には、その価値に関わる別の文章資料を準備するなどの配慮をしている。」の肯定的評価が100%であったことから、教員の、生徒の受け止めを想定した、ねらいの達成を目指した道德授業に対する意識が高く、日頃の学年の打ち合わせの中で指導計画の修正がされていることが分かった。
- 課題 研究の課題である「年度当初の道德教育推進教師による推進・調整・支援の見通しの明確化」がされず、学年裁量による推進となった。これは設問「家庭や地域社会と連携した道德授業にしている。」「本時の道德で学んだことを学級通信等に掲載し、家庭へ広めている。」の肯定的評価が50%前後の低さにも表れ、指導計画の内容が周知・徹底されていないことが分かる。

② 「道德の時間の充実と指導体制」

- 成果 「道德の時間の充実」を評価する指標である生徒対象の「道德アンケート」の結果、道德の時間に対する肯定的な受け止めが向上していることが分かった。これは学年教員全員で日々の道德授業に取り組んだ結果であると考ええる。また、筆者が所属する学年については研究の課題とされた「推進体制整備による教員の多忙感の解消」を目指し、学年の教員が任意にチームを組み、一つの教材で3クラスを授業することで、教材研究が三分之一で済むだけでなく、一つの教材について工夫・改善することで成功体験を味わい、苦手意識のある道德授業に対する自信につながったとの感想を得た。
- 課題 各学年による道德の時間の進捗や内容を学校全体で管理する場がないこと。また内容の充実についても、評価、分析、改善する流れができていない。「推進体制整備による教員の多忙感の解消」についても、年度当初に指導計画を見直していないためにその都度差し替える資料を選定していることや、学校購入の古い資料を主に使用しているために生徒の受け止めの良い資料の差し替えを頻繁に行うことが多忙を招いている。

③ 「道德の研修の充実」

- 成果 筆者は年度当初、校内研修で道德授業を行った。研修を通して、ティームティーチングによる道德授業の在り方や、切り返しの言葉により生徒の思考を深めていく手法を提案できた。これによって少しでも目指す道德授業、生徒の姿をイメージできたのではないかと考える。また夏の研修では道德参観日の資料分析を行うことができた。
- 課題 ①でも記述したが、校内研修において校長の方針や道德教育の重点を十分に周知する場を設定できず、結果的に日々の道德授業が学年の裁量によるものとなってしまった。

(3) 次年度に向けて

次年度は、上で挙げた課題の解決に向けて、推進体制を機能させる必要があると考える。それには「優しさいっぱいプロジェクト」で心の教育の方針や重点を設定する。それに基づきそれぞれの主任を中心とした組織や、生徒が組織する全校推進委員会の果たす役割について協議する。それを受けて特に道德教育については、道德教育推進教師を中心に各学年の道德担当が協議した内容に基づき学年部会で具体的に道德教育の充実について取り組むことが有効であると考ええる。この流れは、例えば人権教育やキャリア教育等、あらゆる教育課題の解決に必要なものである。協働を生み出す組織を構築するために、一層の推進・調整・支援の役割を果たしていきたい。